隈研吾氏、「アフリカの魅力とインパクトを語る」
**　　～アフリカへの熱い想いと建築への原点もお伺いできました！～**

【お話の概要】

・幼少の頃は、『ドリトル先生、アフリカへゆき』に感激して獣医さんになることが夢だった。

・ところが、1964 年、小学 4 年生の時に開催された東京オリンピックは驚きの連続で、特に丹下健三先生が設計した代々木の国立競技場を見たことによって、建築家の存在を知り、建築家になりたいと願うようになった。

・当時、新横浜駅付近に住んでいて、オリンピックに伴い駅が誕生した時は驚いたものの、その後中学生になって、高度成長に伴う鶴見川の汚れや異臭に対して高度成長に疑問を持ち始めた。ただ、建築家になることはあきらめなかった。

・そのころの自分を救ったのは音楽＝ジャズ。マイルス・デイビスなどをよく聞いて、アフリカ音楽を意識するようになった。また、梅棹忠夫氏の『サバンナの記録』を読んだり、後にアフリカで貿易商となった詩人アルチュール・ランボーの生き方に感動して、高校時代はアフリカ漬けの毎日だった。

・1973 年に大学入学、そのまま大学院に進んだ後、選んだのは、原広司教授の研究室。原研究室は世界の辺境の集落を研究しており、過去には中南米やインドに集落研究のために現地を訪れ、いずれも研究生は体調を壊す等過酷な研究を行うところだった。

・そのような原教授でさえも、アフリカへの調査には尻込みされた。教授を説得するため、無事に現地訪問して帰国できる方法を徹底的に調べ、また、西アフリカの航空写真を取り寄せ、集落の仕様が大変面白いことも発見した。

・ついに原教授の説得にも成功し、ゼネコンなどに資金援助を依頼し、富士重工業（現・SUBARU）にレオーネ 2 台をご寄付いただき、アフリカ行きが実現した。

・現地では次から次へと集落を回り、巻き尺をもって家の寸法などを測り 100 か所程度の集落を図面に収めたが、その時に感じたのは「人を信頼すること」。私たちが現地で作業を始めると、子ども達が興味を持って集まり手伝ってくれたので、大人達も警戒心を緩め協力し始めてくれた。集落の壁はいわゆる「アドベ」（土に藁や動物の糞を混ぜた日干しレンガ）

で、屋根は木の葉を葺いていた。また、ほんの 1 キロ違う集落間で建築も違うという発見もあった。

・ほとんど毎日、テントを張って野宿や自炊をしながら、現地で学んだ「アフリカにおける大地とつながった建築』は、その後大いに役にたった。

・その後、干ばつが続いているセネガルで、5-6 年間審査委員長を務めている建築コンペや、カサブランカのミュージアム設計プロジェクト、そして今 SPJ と進めようといるガーナにおける職業訓練校設立事業を通じて、自分のアフリカへの思いがいくつか実現できている。

・アフリカは地球上の環境問題の多くの犠牲になっていると感じており、建築を通じて今後もアフリカの問題を解決していくことで、「アフリカに恩返ししたい」と考えている。

以上。